



新選 地理総合

— 研磨と再構築の果て —

実教出版編修部

教科書の使いやすさとは

教科書の使いやすさとは何か、編修部の頭痛の種でありつづけたこの言葉は旧版教科書『地理総合』からの一貫した問いであり、ここから創出されたコンセプトは、①教えやすい、②速習できる、③準備いらず、の3点である。

コンセプトをふりかえる

①教えやすい

新設科目の地理総合では、歴史・公民専門の先生方が地理総合を指導するケースの増加が見込まれた。そこで、「専門性を問わず使える教科書」という方針の下、歴史的背景を踏まえつつ地理総合を指導できる工夫や、歴史や公民の指導領域に通ずる「地誌分野」に比重を置いた構成を採用した。

②速習できる

「地誌分野」に比重を置く構成は、ページ増の主因となった。そこで、学習指導要領を踏まえつつ、地域を選択できる構成を採用した。

③準備いらず

学習指導要領で、「GIS（地理情報システム）」への言及がなされたため、指導不安を訴える声が散見された。ただし、学習指導要領で求められていたのはGISの自体の操作ではなく、GISの役割や有用性を理解することであった。そこで、パソコンやスマホを用いずにGISの役割や有用性を理解できるよう、透過シートを利用したアナログの「体験型GIS教材」を採用した。

また、地理的技能の習得に資する教材を準備することへの不安の声も多く聞かれた。そこで、演習型コラム「アクティブ」を立ち上げた。加えて、授業進度や生徒の理解度にあわせて、ビューフェ形式で扱えるよう、教科書付属教材として「巻末ワーク」を採用した。

課題と、改訂教科書での改善

コンセプト実現の過程で2つの課題が生じた。

1つ目の課題は、全方位型の使いやすさに起因する器用貧乏感である。地理・歴史・公民専門の先生がそれぞれの専門性を発揮できる内容構成は、使いやすさが専門性に留まってしまい、かえって中途半端さへの帰着を促してしまった。専門性にかかわらず、あらゆる先生が使いやすいという点を実現するべきであった。

この課題に対しては、使いやすさの矛先を、先生方の専門性だけではなく、「先生方自体」に向ける形で対応した。具体的には、教科書に指導書の要素を適度に組み込み、「指導の流れを見通せる紙面構成」の創出を徹底することで、1授業時間の道筋を常に視認できる形をめざした。加えて、現場からは「教材準備に使える時間がない」といった声がお多かったため、1授業時間の道筋のなかに無理なく組み込める、〇×式の学習教材（Check）を全紙面に掲載した。一方で、授業の流れが一本道にならないよう、旧版教科書から引き継いだ歴史的・公民的な資料・コラムで、専門性に応じた脇道に自然と逸れることができるようにした。

2つ目の課題は、ボリュームーな内容構成に起因する負担感である。特に地誌分野の負担感は、速習のための工夫だけでは拭いきれなかった。加えて、「選択できる工夫」と「教科書内容は一通り指導しておきたいという現場感情」が噛みあわなかった点も負担感につながった。また、上記の現場感情は、巻末ワークにも作用した。生徒の表現力養成（記述型設問）に比重を置いた巻末ワークは「一通り取り組ませるには少々重たく、時間もかかる」といった評価になってしまった。

この課題に対しては、内容を精査し、教科書の質を落とすことなく、量だけを削ぐ形で対応した（24p減）。そのうえで、「②速習」という点では、防災教育と地域調査を一体化させ、時間が限られる中で無理なく両単元をカバーできるようにした。加えて、「③準備いらず」という点では、巻末ワークの設問を簡略化するなどして負担感の軽減をはかりつつ、中学地理レベルの設問を採用し、復習教材としても利用できるように調整した。